赤いランドセル

斎藤澪

カドカワノベルズ

昭和五十七年五月二十五日初版発行
昭和五十七年十月三十日四版発行

著者　斎藤澪（さいとうみお）
発行者　角川春樹

赤（あか）いランドセル

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社大谷製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
電話東京三二六-七二一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-772701-0946(0)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

KADOKAWA NOVELS

歩くのハンパない

海機 駿（スガ）

カバー絵・本文イラスト／福田隆義

目次

第一章　熱風の中の死　9
第二章　渦巻く過去　79
第三章　穢(けが)された記憶　139
終章　211

第一章　熱風の中の死

1

雪が霙にかわって、節分の夜が翳を濃くした。風も少し出てきていた。

――オニはそとォ。フクはうちィ。

冷たい闇をぬって、甲高い子供の声が遠くできこえ、汚れた藍色の空に消えた。父親の帰りを待っていて、豆まきが遅くなったのか。

ぽつぽつ八時になろうとしていた。

女が一人、マンションの扉を開けた。灯りがコンクリートの通路に流れ、すぐに消えた。女は豆まきの声のあがった方向へ目を走らせ、プラスチックの籠を抱えなおした。遠くの雲が一か所、朱を滲ませたように赤黒いのは、火事なのかもしれなかった。だが風向きのせいか、消防車のサイレンの音はきこえない。

女は背中を丸め、マンションの薄暗い通路を小走りで進んだ。顔や手に痛いような寒さが突き刺さった。

エレベーターの前に立つと、女は DOWN のボタンを押した。尺取虫のように這い上がってくるボタンのランプ。女は小刻みに足を踏み鳴らし、首をすくめ、黄色いランプを数える。8。9。10――。のろのろとエレベーターのドアが開く。まぶしい光の中に入って B1のボタン、つづけて CLOSE のボタンを押す。

B1。倉庫のような、青白い光の貼りついた通路に、サンダルの底をこする音が響く。奥に進むにしたがって、毛糸の焦げるような獣なにおいが漂ってくる。

――洗濯物が焦げている！

女は足を早めた。

女は奥のガラスドアを開けながら、ガラス越しに乾燥機を見た。その乾燥機は停まっていた。

女の顔に安堵の色が広がった。焦げていたのは、彼女の洗濯物ではなかったのだ。

だが、開けかけたドアの隙間から、もの凄い悪臭が吹きつけた。しかし、それと気づいた時はもう、女の身体は無人のコインランドリーの中だ。生ゴミをいぶ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

しているような得体の知れないにおい。そして乾燥機の熱風が換気扇から逆流しているのか、ムッとする熱気が凄い。女は思わず手で鼻を覆った。

——何よ、このにおい。一体どうしちゃったの！

女は目をしばたたきながら室内を見まわした。どこといって煙の出ているところは見あたらない。あちこちに置かれたアルミの灰皿は吸殻があったり、なかったり。そして洗濯機は陶器のように白く光っていた。四台の乾燥機で、動いているのは一台だけだ。

女は入口のすぐ横の壁の電話に手を伸ばした。このコインランドリーの事務所に直通の電話だ。

「モシモシ……、モシモシ。コインランドリーが変なのよ。すぐ来てちょうだい」

情況を説明しようとして、女はまた室内に目を走らせた。故障しているとしたら、今ゴトゴト音をたてて動いている、あの乾燥機しかないだろう。

「誰かがまたいつかみたいに、乾燥機に猫でも放り込んだんじゃないかしら。たまらないわ、このにおい！吐きそうよ、あたし……」

そういいながら、女は乾燥機の丸いドアをみつめた。洗濯物を出し入れする丸いガラスドアに布がよじれ合って貼りつきながら、ゆっくり、右に左に揺れている。その布の花柄模様に見覚えがあった。それは彼女のシーツによく似ていた。だが、そんなはずはなかった。彼女が洗濯したシーツやGパンなどを入れた機械はすでに停まっているのだ。

目は自然に、自分の洗濯物へ流れた。

黒っぽいガラスドア。無数の孔の開いた鉛色のドラム。だが、その中で乾いているはずの洗濯物は見えなかった。

女は受話器を持ったまま、一歩近づいた。乾燥機の底を覗いてみたが、中はやはりからだった。

何が何だかわからなくなって、女は一列に並んでいる四台の乾燥機に視線を走らせた。洗濯物が入っているのは、奥で今もゴトゴト動いている一台きりだ。女は眉をしかめ、薄気味悪そうにその機械をみつめた。

花柄のシーツ。Gパンらしき藍色の布。ピンクとブルーの縞柄のバスタオル——全部彼女のものだ。

そういえば、中で揺れている洗濯物の動き方も、妙だ。普通なら、左に弧を描いて、大きな波が砕けるよ

うに落ちてくるのが、今はただ右に左に揺れているだけ。それに洗濯物の間から、何か奇妙な格好をしたものがはみ出していた。

「ちょっと、このままで待ってくれる？」

女は一旦電話から手を離し、おそるおそる機械に近づいた。あれはゴム手袋？　それにしては小さすぎだ。縫いぐるみの人形だろうか。女は目をこらしてみつめた。

不意に背筋が震えた。キナ臭いにおい。喉の奥がむかつく。血が引いてゆく。それでもガラスドアから目を離すことができなかった。

どうみてもそれは人間の手だ。それも、子供の手だ——。

女は吐気に襲われた。思わず両手で口を抑えた。手に持っていたプラスチックの籠が床に落ちて弾んだ。女は前かがみになり、やっとの思いで電話のところへ戻った。

「乾燥機に……子供が……」

それだけいうのが精一杯だった。ついに我慢できず、ドアに身体をぶつけるようにして通路に出た。

コインランドリーの中では子供の入った乾燥機がゴトゴト動きつづけ、手を離れた受話器が大きく揺れていた。この事件の発見者・小島悦子はまっ青な顔をして、エレベーターに向かって必死で走っていった。

＊　＊　＊

午後八時五十分——。

和田良平のデスクの電話が鳴った。受話器を取ったのは和田のアシスタントのミカだった。ミカはあたりを見まわし、「和田さん！」と叫んだ。

テレビ番組制作局第二編成室はこの時間、午後番の担当者と、夜番・明朝番の徹夜組とが入れ替わる時でざわめいていた。その上、部屋の隅のテレビから、歌謡ショーの生番組がオンエア中だ。彼女はもう一度「和田さん！」と叫んだ。

テレビの前を通りかかった男が、ソファで横になっている和田の肩をゆすった。目をこすりながら起きた和田が、ぼんやり、声の方を見た。その細い目にむかって、彼女は「電話よ」といった。

和田は油気のない髪の毛を掻き上げながら立ち上が

った。顎の張った、顔の大きなわりには、背の高さはそれほどでもない。灯りを腕でさえぎりながら眠っていたのか、赤くなった額に袖のボタンの跡がついていた。

「誰から……」和田はかすれた声できいた。

「タケさんから」

「タケ……！」

和田はあわててデスクへと走った。タケとは山崎武司のことだ。この時間、山崎からの電話となれば、用件は決まっていた。事件だ！　和田は広い部屋の中を見まわした。しかし彼の上司である杉山喜雄の姿はなかった。

「杉山さんは？」受話器を受け取りながら、和田はミカにきいた。

「味平よ」

杉山はテレビ局の前にある小料理屋で、制作室室長と打ち合わせ中だという。

和田は山積みになっている資料の上にメモ用紙を置き、「和田です」と性急にいった。

「山崎です。どうも。今、鑑識の車が出たとこですよ」

「鑑識の車が！」

和田は受話器を握りなおした。

「殺し？」

「そう。コインランドリーで子供の死体が発見されたというんで……」

鑑識課が出動したということは、事故死や変死でなく、明らかに殺人事件というわけだ。

「で、どんな情況？」

「詳しいことはまだ……。何でも子供は動いている乾燥機に閉じこめられていたらしい」

「ひでえことやるな……」

「そうなんだ。それでこっちも今、みんな飛び出していったよ」山崎は声をひそめてつづけた。

こっちとは警視庁の記者クラブのことだ。そして山崎は、政治経済面に重きをおく大手新聞と違って、スポーツ・芸能面を得意とする東都新聞の記者だった。

最近テレビの娯楽番組に、実際に起きた事件のレポートものが多くなった。朝のワイドショー〝奥さまモーニングニュース〟にも週に一度、そうした類の番組

があり、和田がチーフ・ディレクターとなっていた。山崎はその番組の陰の協力者だ。

娯楽番組のスタッフは、新聞記者やテレビニュース報道班と違って、自由に記者クラブに出入りすることはできない。そして同じテレビ局内でも、報道班が詳しい情報を流してくれるわけでもない。むしろ同じテレビ画面を作る者同士、激しい競争がある。とくに事件が大きい場合は熾烈だ。だから娯楽番組チームはどうしても遅れをとる。そこで新聞記事やテレビニュースをもとにした取材と平行して、自分たちの番組を個性的に、おもしろく構成しようと、あの手この手を考える。

〝奥さまモーニングニュース〟は番組名にニュースとうたっているように、あらゆる分野のホットな事件を取り上げるのを看板にしていた。そのためには各方面に情報網を張りめぐらしておくことが必要だった。山崎武司は和田担当の、そうした警察関係情報協力者の一人なのだ。

「子供が殺されたとなりゃ、明日は大騒ぎだな」

「しかもやり方がひどすぎるよ。当然、新聞もドカンと大きくいくんじゃない」

「それじゃ、こっちも負けちゃいられないぜ」

山崎は事件のあったコインランドリーの場所を説明し、

「僕もこれから飛ぶので……」といって電話を切った。

和田はすぐさま味平のダイヤルを回した。店のざわざわした音がきこえてくる。

「杉山さんいるだろう、大至急呼んでよ」

「ちょっと待ってください」

女の子の杉山を呼ぶ声がきこえた。

「おいしい話かね」杉山が不機嫌そうな声でいきなりいった。

「おいしいのはお酒でしょう。殺しです」

和田も単刀直入に答えた。

「殺し？　今夜は静かに飲めると思ったのに……」

「四、五歳ぐらいの女の子がコインランドリーの乾燥機の中で、死体で発見されたそうです」

「ほう……」

杉山の驚いた顔がみえるようだ。そして受話器に口

を近づけたのか、杉山の声が急に低く、太くなった。
「今度は洗濯機じゃなく乾燥機か。殺しに間違いないんだな」
「ええ、鑑識が動いたといいますから」
杉山はフーッと息をつき、「すぐ帰る」といった。事件が幼女殺しとあっては、杉山も落着いていられるはずがなかった。
和田も、なぜともなくため息をつき、今度はプロダクション33のダイヤルを回した。
和田が受話器を置いたとき、杉山が部屋に入ってきた。杉山は退社する連中に手を上げて応えながら、まっすぐ和田のところへ歩いてきた。
杉山は和田のそばに腰をおろした。腹がせり出してきた杉山は股をひろげ、眼鏡をはずすと、ハンカチで顔中の汗を拭いた。
「どういうこと？」
杉山の、脂肪で黄色く濁った目が、酒のせいで血走っているように見えた。
「それがですね」和田は杉山から目をそらし、メモを見ながらいった。「今夜八時頃、田園調布二丁目、以前多摩川遊園地があった、あの裏あたりだそうですが、いずみ野ハイツというマンションの地下一階にあるコインランドリーの乾燥機の中で女の子が死んでいた……」
「それは聞いたよ。それで？」
杉山の強い口調に、和田の顔はたちまちまっ赤になった。和田はどもり、それから一語一語区切るように話した。
「女の子はコインランドリーに入れられる前に、すでに死んでいたらしいんです」
「死んでいた？　死因は？」
「まだわかりません」
「じゃ、犯人はコインランドリーの乾燥機に死体を押し込んで逃げたというわけか」
「しかも乾燥機はゴトゴト動いていたそうです」
「動いてた？　どういうこっちゃ！」
「その上、子供の身元がまだわかってないそうで……」
「なんだって！」
杉山の赤い顔が一層紅潮した。

「するとなにかい、こんな時間になっても四つ五つの子供が帰ってこないというのに、親は警察に届けてもいないというの？」
「そういうことになりますね。もしかしたら近所の子供じゃないのかもしれませんが……」
「それにしたって今時分は五時には暗くなるぜ。普通の親なら六時すぎたら大騒ぎをするだろう。こりゃア、子供の家庭に何か問題があるのかもしれないな。それで現場には誰をやる？」
「もちろん、僕が行きます」
杉山はジロリと和田を見、煙草に火をつけた。
「で、カメラの手配は？」
「もうプロダクション33に連絡しました。うまい具合に野々村さんがいて、三十分でスタッフをこっちに送ってくれるそうです」
ドラマにしろドキュメンタリーにしろ、あるいは子供向けのアニメーションにしても、こうしたフィルムもののほとんどは外部のプロダクションが製作している。つまりテレビ局は各プロダクションに外注し、出来あがったフィルムを受け取って、自社のブランド名で電波にのせるというわけである。これは和田が扱っている事件ものにしてもそうだった。だが仕事を請負ったプロダクション側もまたフリーのカメラマンやライトマンを使う場合が多いので、今夜のような突発的な仕事が入った時など、プロダクション側はスタッフ集めに苦労する。その点〝奥さま……〟の事件ものを長いこと手がけてきた野々村哲也の腕は確実だった。それに今は撮影もビデオカメラだから、フィルム撮影と比べて機材も人員もコンパクトになっている。スタッフの顔さえ揃えば動き出すのは早い。しかし明朝、番組を一部変更してでも事件の模様を報ずるとなれば、担当ディレクターとして当然、和田は今夜の取材につき合わなければならない。
「霙、まだ降ってますか？」
「仕事に天気は関係ないだろうが……」
杉山は煙草を口にくわえたままでいった。
煙草を吸わない和田は杉山の汚れた口もとに目をやりながら、今夜はついてないなと胸の中でつぶやいた。事件発生がもう一時間遅ければ、杉山は制作室室長と銀座あたりへ飲みに行っていただろう。そうなれば和

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong